

## 宗教勧誘への感情の由来 —戸別訪問に焦点をあてて—

増野 陽子

近年の研究では直接的に宗教と関わる行動（礼拝など）を行っている人の割合は減っているものの、「お守り・お札」「おみくじ・占い」「(合格)祈願」に代表されるライトな宗教的活動については最近40年の間に5%前後上昇している傾向が示された（NHK放送文化研究所;2014）。これは年中行事として宗教的活動を行っている人が増えていることが要因と考えられる。

現在の日本において、戸別訪問は非常によく知られる宗教勧誘の手段であるにもかかわらず、他の勧誘方法と比べて嫌悪感を持たれることも多いと言われている。これには個人が宗教そのものをどうとらえているかだけでなく、家庭においてどのように宗教と向き合ってきたか、ということが関係していると考えられる。

そこで本研究では宗教に対する寛容度に変化があると仮定して調査項目を作成した。宗教勧誘への感情と、よりライトな宗教的活動を行う感情には、各々のライフストーリーが影響していることも想定した。さらに本研究では、宗教に対する寛容度をはかるために前述のようなライトな宗教的活動を行うモチベーション等を深く掘り下げるように調査を行った。

調査対象者は宗教勧誘について、勧誘者または被勧誘者あるいは両方の経験を持つ人とし、5人に対してライフストーリーを中心とした半構造化インタビューを2回ずつ行った。内容としては戸別訪問が疎まれている理由と、調査対象者とその家族の宗教観を調査した。そのため、勧誘者としての視点を持つ調査対象は新興宗教に分類される宗教の信者から選定した。

調査の結果、本研究においては宗教勧誘に対する感情の由来は宗教に対する寛容度と深く関係がある可能性が示唆された。「信仰の有無」と「宗教に対して寛容・親和的か否か（家族の信仰の有無によって、寛容と親和性が分かれる）」を掛け合わせた、宗教の親和性に関するマトリックス構造であらわされるということが導かれ、個人の語りから調査対象者をマトリックス構造上に配置できた。宗教に対する親和性への語りにおいて、宗教に対して「個人が救われると信じているだけで悪いものではない」と感じている人と「怖い、あまり近寄りたくない」と感じている人が見られた。これらをそれぞれ、宗教に対して親和的か否かという視点に分ける。信仰の有無にかかわらず宗教に対して親和的である人は、戸別訪問による宗教勧誘そのものを嫌悪しているわけではないが、彼らも見知らぬ他人の突然の訪問や、コミュニケーションは嫌悪していることがわかった。

以上より、宗教に対して親和的であるか否かは戸別訪問による宗教勧誘への行動にはほとんど関係が見られなかった。他方、被勧誘時に持つ感情は、育った家庭の宗教への親和性や寛容さに強い影響を受けることがわかった。

（指導教員 後藤嘉宏）